
リュカ・L・グレーネスは分からない

ぴざぽてと2号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リユカ・L・グレーネスは分からない

【Nコード】

N8702X

【作者名】

びぞぼてと2号

【あらすじ】

鬼畜シヨタがハーレムを作るよ！

流行りらしいから異世界転生させるよ！

というぽつと出のネタで書く、不純&見切り発車な初投稿です。下ネタが多くなると思われますので、そういうものが苦手な方はそつと戻っていただけるとありがたいです。

この作品はフィクションです。作品内に登場する名称、事件等々は実在のものとなんの関わりもありません。

なお、更新が止まった際は「作者が羞恥に耐えられなくなった」と思ってください。
誤字報告でもいいので、感想などいただけますとありがたいです。

いつの間にか死んでいた平坂薫が、リュカ・L・グレーネスとして転生したとき、最初に考えたのは「この性欲をどうしようか」というひどく下卑たものだった。

生まれたばかりの彼は、年若い乳母に抱きしめられていたが、その胸が当たっているのだ。精神的には24才の一般的な成人男性の彼とすれば、これは拷問だ。

目の前に魅力的な双丘があるにもかかわらず、赤ちゃんなので触ることができない。普通のサラリーマンとして働いていた頃なら、性的に興奮すれば発生していた生理現象も起きない。

リュカは自分の股間を恨めしげに睨んだ。それはどうやら乳母には赤ん坊がぐずっていると見えたようで、よしよしとあやされる。

その拍子に、より強く押し当てられる胸。

これからそれこそ十年位、こういう生殺しの状況が続くわけか……。自分で慰めることもできず。耐えられるかね？

出た答えは強い否定。

彼は自分があまり人として上等な人物でないと思っていた。

権力を握れば増長し、金を持って増長する、そういう人間である、と。

そして、彼は自分のそんな性分を変える気がなかった。

だから彼はほくそ笑む。

前世での知識を使えば、うまくやれる。それこそ、ハーレムと
かも作れるかな。

転生してすぐに、グレーネス家は裕福な家のようにだと気づいた。

リュカには専門のメイドが何人もつき、毎日朝から晩までつきつきりで世話をされる。まだあまり動けないために周りの様子をうかがい知ることが難しいが、それでもリュカの住む部屋が非常に広く、調度品も格調高いものだと分かった。

好都合だ。金があれば、多少の無理は通る。

リュカは金に物言わせて弱者を虐げる自分を想像してすこし笑った。

そんなリュカを見たメイドの一人が微笑んだ。どうやらリュカがほくそ笑むさまははたから見ると赤ん坊がキャツキャと無邪気に笑っているようにみえるらしい。

「リュカ様、

。、。。

」

メイドがなにか言っていてリュカを抱きあげる。リュカ様しか聞き取れなかったが、言語の違いは仕方ない。

言語どころか、世界が違う。前の「平坂として生きてきた世界」には、このメイドのように耳の尖った浅黒い肌の種族は存在しなかったのだから。

「

」

彼女は大切そうにリュカを抱き寄せると、メイド服の前をはだけて乳房をあらわにした。

リュカは彼女の形のいい乳房を口に含み、母乳を飲む。赤ん坊としては至極まっとうな行為にも関わらず、精神年齢24のリュカとしては釈然としない。

まあ、仕方ないか。

体が弱くては、出来ることもできない。そう割り切ることにしたリュカだった。そういうことができるようになるまで、時間は嫌というほどある。

それまで、何か別のことにうちこむのも悪くはないかもしれない。

授乳をされたまま、リュカは今日何度目ともしれない眠りに落ちた。

世の中でうまく立ち回るために、情報収集はかせない。

そんな信条と、ハーレムを作りあげるまでの手慰みを探すために、リュカは言語の分からないなりにメイドたちの世間話に耳を傾けた。

最初こそ自分の名前であるリュカ位しかわからなかったものの、二日、三日、一週間、そして一ヶ月と聞いているうちに、だんだんと彼女たちの会話を理解できるようになってきた。時間はたっぷりあったので一ヶ月ただ耳を済ますだけの生活も苦痛ではなかった。

メイド達の会話が正しければ、リュカの家、グレーネス家はこの世界のレティリシア王国という国の、ロークフィード地方を治める伯爵家のようだ。

レティリシア王国がどの大陸に位置する、などの情報は得られなかった。そもそも、異世界なのだからそういった概念がないのかもしれなかった。

父の名前は、ラファラン。母の名前はアデライト。三才年上の兄、ジルがあり、全員が色素の薄い肌、金髪、そして灰色の目をしているらしい。メイドの一人はリュカの家族のことを天使一族と呼んでいた。美形の多い一族らしい。

僕が薫だったときの世界での、フランス人名ばかり……。

何か共通点でもあるのだろうか。ただ、あったとしてもそれがリュカの「目的」にプラスになるとは思えなかったので「これはそう

いつものものだ」と納得させた。

リュカにとって大事なものは、自分が美形の多い、特権階級の家に生まれたということのみだ。

まるでそうしろと言わんばかりにお膳立てしてくれるじゃないか。

おまけに、伯爵としての責務を背負わなくてはならない長男ではなく、ある程度自由の利く次男。リュカにしてみれば欲を言えば三男が良かったのだが、そこまでの贅沢は言わないことにした。

文明レベルは、メイド達の会話を聞かなくても分かる。壁に立てられた蝋燭や、壁の彫刻から、中世ヨーロッパが近いだろうか。これも好都合だった。

あまり発達しすぎていても、その逆でも、ハーレムは作りにくいだろうし。

一つ驚いたことは、この世界には魔法が実在するらしい、ということだった。夜になると蝋燭がひとりでにつき、メイドが何か唱えるとミルクが人肌にまで温められる。そんな光景をリュカは何度か見た。

催眠だとか、拘束だとか、そういう魔法もあるのかな？ あんなら覚えておいて損はないよね。

そんなことをリュカが考えながらメイドたちが働いているのを見ていると、転生して最初に見た人であり乳をくれた人でもあるダークエルフのマイラが気づき、坊っちゃんはどうしたのかと首をかし

げた。

一瞬見透かされたように感じたものの、リュカは慌てず可愛らしい笑顔を返し、マイラの乳をせがむ。とっさに乳をせがんだのは、お腹がすいているのも確かにあったが、ほかの理由が大きかった。

「坊っちゃん。またですか？」

困ったように言いながらも、仕事だからか抵抗なく服をはだけるマイラ。健康的な黒い肌と銀色の透き通るような髪のコントラストに息を飲んだ。

「そんなにあげてると娘さんにあげるぶんがなくなっちゃうんじゃないですか？」

まだここに務めて日の浅いメイドが苦笑いをする。そう、母乳が出ることから良く考えれば当たり前なのだが、マイラには娘がいた。リュカより年は一つ上らしい。

マイラはリュカのハーレム計画のトップに名を連ねていたので、彼女が人妻だと知ったときは、美人な彼女を射止めた男を恨んだり嫉妬したが、今はもうそういう感情はない。

マイラの乳に吸い付きながら、リュカは喋ろうとしてみる。

「あら、どうしたの？」

結局ばぶーとしか言えず、マイラが慈愛に満ちた顔で見つめてくる。リュカは相手に伝わらないことをいいことに、無邪気な笑顔で言う。

「親子丼が食べたいな、と言っただんですよ」

3 (後書き)

3 話目の時点で作者の羞恥耐性はもう……

親子丼に深い意味はありません

そういつことにしておいてくださいますか

会話を聞き取れるようになって、リュカは自分が失敗していたことに気づいた

メイド達の間で、「ぼっちゃまは泣いたことがない」と言われてしまっていたのだ。気味悪がられてはいなかったのが幸いだったが、なるべく目立ちたくないリュカにしてみれば、これは失敗だった。

リュカは機が熟すまで目立ちたくないのだ。たとえば、前世での知識を使えば簡単に富と名声が手に入るとしても。

もし、リュカが何も持っていない家庭に生まれたなら話が違ったかもしれないが、リュカは幸運にも伯爵家というある程度富も名声も転がり込んでくる家に生まれた。なら、焦る必要はない、と考えていた。

リュカは自分の知識を使えば、この世界の構造をひっくり返すことも可能だと思っている。だが、それまでだとも。世界を変えられなくても、美人とイチヤイチャできなければ意味がない。

翌日から、リュカは赤ん坊らしく振舞うようになり、メイド達の間で泣いたことがない、という話は出なくなった。

マイラに抱きかかえられてあやされるのは気持ちよかったが、それ以上に恥ずかしかったが。

この羞恥に耐えられるだろうか……。

排泄すらメイド達に見られてしまう状況に、さすがに不安になる。何年後か先、教育機関に通うのも不安の種だった。勉強のできる、できないではなく、同級生とまともに会話できるのか、という点で相手は自分を同格と見るだろう。しかし、精神年齢で言えば何回りも上なのだ。

少しばかり憂鬱になるリュカだった。

六年後、リュカの不安は的中した。

4 (後書き)

この羞恥に耐えられるだろうか……。
by 作者

「ただいま帰りました！」

グレーネス家の屋敷に、ダークエルフの、小さい女の子の声が響きわたった。

そろそろ帰ってくるだろうと玄関で待っていたメイド達が一斉に頭を下げる。

「お帰りなさいませ」

リュカは元気よく挨拶した女の子の後ろに隠れるようにしつつ、小さく「ただいま」と返した。

「リュカ君、もっとハキハキしてください」

途端に女の子にたしなめられ、しゅんとなる。

女の子の名前はクリスティアナ。マイラの娘で、母親同様、褐色の肌に長い銀髪を持つ少女だ。おそらく、十年後には絶世の美女として名を馳せるだろう。もちろんリュカのハーレム名簿に候補として載っている。

「強要はいけませんよ、クリス。リュカ様はおとなしい性格でらっしゃるのですから」

今度はマイラがクリスをたしなめる。マイラの存在に気づいて、リュカはマイラに抱きついた。あらあら、とメイド達が微笑む。

ちょうど会食に出かけるところだったリュカの両親も微笑ましくそれを見ていた。母親、アデライトが呟く。

「これじゃあ、どちらが母親か分からないわね」

「仕方がないさ。これも貴族に生まれたものの宿命だよ」

父親、ラファランがそんなアデライトを慰める。ラファランは背の高い、いかにも有能そうな渋い色男であり、アデライトは小柄でどこか儂げな印象のある美女である。

そしてどうやら、リュカは母親の血を色濃くついだらしく、同年代の子供と比べると小柄で、よく女の子に間違えられる。ちなみに、兄であるジルは父に似ている。

「それじゃ、行ってくるからな。クリス、今日もリュカと遊んでやってくれ」

ラファランがクリスにそう言い残し、二人は家の前に止まっていた馬車で出かけていった。メイド達とクリスが行ってらっしゃいませ、と一礼する。

「じゃ、リュカ君。部屋で遊ぼっか」

馬車が見えなくなると、クリスがリュカの手を引っ張ってリュカの部屋に連れていく。彼女は、両親が普段構ってやれないリュカがかわいそうだ、と遊び相手として任命されている。メイドとしての仕事は忙しく、夫も仕事で忙しいマイラが安心して仕事ができるように、という両親なりの配慮も多分に含まれている。

だから、遊び道具などもたくさんある。部屋の中にある遊具を見回して、クリスがリュカに聞いた。

「何で遊ぶ？」

「僕はなんでもいいよ」

大人しくリュカはクリスに従うつもりだった。

一日が終わり、ようやくリュカは一人きりになれた。思わずため息をつく。おとなしい外向きの顔をやめ、苦々しく舌打ちしてベッドに倒れ込んだ。気弱で頼りなく、女男とからかわれて涙目になる普通のリュカを見ている周りの人には想像できない姿だ。

同級生とまともに会話で来るか不安に感じてから早八年。結論として、リュカの不安は的中した。いわゆる前世での幼稚園、そして小学校に通い、今は小学三年生にあたる学年にいるが、正直苦痛となっている。

簡単すぎる授業内容、低レベルなことで盛り上がる同級生達、当然のことながら、リュカと話す際子供と話すように喋る大人達。それらはリュカをイライラさせた。

そのたびに、リュカの歪んだ欲望は膨張していく。

唯一、幼馴染であるクリスが純粹で汚れを知らない少女だというのが救いだっただ。おまけに、本人に自覚はないだろうが、リュカに

淡い恋心を抱いているのを知っている。そもそも、リュカがそのようなように仕向けたのだ。いくら立派な両親に教育されたとはいえ、彼女はまだ幼すぎた。リュカがその心を掴むのにさほど時間は掛からなかった。

ただ、彼女を汚すのはリュカの肉体的にまだ無理だ。いつかそうする日を希望に、明日も頑張ろう、とリュカは深い眠りに落ちていった。

自分が人から見ても「カッコイイ」ではなく、「カワイイ」と思われる人間だと知ってから、リュカはおとなしい人間を演じている。

そのほうが女性からの受けがいいのだ。主に年上の。

メイド達には一部の貴族がしているような尊大な振る舞いはせず、何かしてもらったらず必ずお礼を言うようにして、両親の言うことには従順に従い、兄を慕い、クリステリアナを本当の姉のように好んでいる。両親の教育方針によって入れられた身分の違いによる差別をしない学校では商人や農民の息子、娘と分け隔てなく学び、遊び、「さすが、伯爵様の息子さんはそこの貴族とは違うね」と噂されてはにかむように笑う。

全て、人に好かれるようにリュカが演じている表向きの顔だ。本当の自分がもつと下衆なものであると知っているリュカは、人が自分を褒めているのを聞くと笑い出しそうになるのを必死にこらえなくてはならなくなる。

その笑顔を人は恥ずかしがっている、と取るらしい。

まあ、好都合だからいいんだけど。

リュカとすれば利用しない手はない。リュカは良く笑うように努めた。それでも、周りのレベルに合わせるのがたバカバカしくなつて笑えないことがあったが、幸いにも周囲の人間には気づかれていないようだった。

熱いお風呂につかってるようなものだね。

リュカはそう考えている。周囲の人にとってはまだ熱すぎて、入っていられるのは前世でこの熱さを経験しているリュカだけだが、そのうち周囲も成長していき、熱い風呂につかれるようになる。そのとき、リュカが同じ風呂につかっているようでは駄目なのだ。より熱い風呂に入れるようになっていなければ、転生というアドバンテージを潰すことになる。

それだけは避けたいな。ただ、子供だけのコミュニティだとうしてもまともな情報交換、勉強はできないんだよね。

そんな考えから、リュカは父親、ラファランに一つお願いをした。

伯爵として仕事をする父の仕事ぶりを見たい、と。

ラファランは邪魔だけはしないように、としかつめらしく言ったが、後で母親に「親として初めてあの子に頼られたぞ！」と喜色満面で報告していた、とメイド達の会話から盗み聞いている。

その日から、父が領民の陳情を聞くときや、客人とラファランが会食をしているときに、リュカはこっそりその様子をうかがい知ることができるようになった。

さすがに本当に見せられないものもあるようで、そういうものはさりげなく見られないようにされていたが、それでも十分勉強になった。

リュカにとって計算外だったのは、父の仕事している姿を見られるようになったのがリュカだけでなく、兄のジルと、メイド見習い

兼遊び相手のクリスもそうだったことだった。兄のジルは弟であるリュカが父の背中を見るようになれば必然的に同じ方向を向くのはまだわかるが、クリスがそこに参加するのがなんとも不思議だった。リュカはクリスが父親とマイラの間に出来た子供なのでは、とも思ったが、だったら余計にこんな疑われるようなことはしないと気づいて、訳が分からなくなつた。

結局、お目付け役なのだろうとリュカは結論づける。ラファランの仕事を見るようになってすぐ、誰が始めようと言つたわけでもなく、ラファランの仕事ぶりを見ては三人で感想を言いあつのが常となつていった。

リュカは全部の情報を好き嫌いなく客観的に、しかし子供っぽく感想を言うようにしていたが、ジルもクリスも好きな分野、嫌いな分野があるようで、喋ることに偏りがあつた。

ジルは「北方で流行病が発生していること」や「今まで治せないと言われていた病気の治療法」といった話を熱心に喋り、クリスは「誰も素顔を知らない凄腕の傭兵」や「騎乗での二刀流ならぬ二槍流の有用性」といった話を好んで喋つた。

リュカでなくとも、二人が将来何になりたいか分かる。しかし、二人とも幼いながらに自分の立場を理解している。伯爵家長男が町医者にはなれないし、メイドの娘が騎士になることもできないのがこの世界の理だった。

それをどうこうする気はない。この世界の言葉に、こんなものがある。

「貴族の家には貴族が生まれ、商人の家には商人が生まれ、農民の

家には農民が生まれる。ただ、奴隷だけはどの家からも生まれる「

それがたとえどんなに理不尽だったとしても、まかり通っているならリユカはそれを利用する気だった。

6 (後書き)

今回色々なことを詰め込んだので話がぐっちゃぐちゃに……すみません。

シモネタが少ないぶん作者としては楽ですけど。

こゝこの6話に伏線なんてないんだからねっ！

リュカは一度、父親に奴隷のことについて聞いてみたことがある。ラファランは苦い顔をして、奴隷のおよそ一割はなんらかの罪を犯した人間がその代償として奴隷の身分に落とされているのだと教えてくれた。そして、残りの九割は北方から連れてこられた罪のない人々だとも。

ラファランの口調は重々しく、奴隷制度を良く思っていないのははっきりと見て取れた。

確かに、奴隷制度は良くないことだ。それはわかる。が、ハーレムを作るうとしているリュカにとっては都合がいい。

ラファランはそこで話をやめてしまったのでそれ以上の情報は得られなかったが、リュカはいつか奴隷を買おうと、秘密裏にお金を貯めている。

そのお金が十分に貯まる頃、自分の男としての機能が成熟しているだろうとリュカは考えていた。そして、その予測は当たった。しかし、予想外の事態も起きた。

奴隷を買おうと決めてから二年後には精通が起き、そこからさらに四年。リュカは十四歳になった。もし精神年齢も成長しているとすると、精神的には既に四十近いことになるが、最近の若いもんは、などとオヤジ臭いことを考えたことはないので大丈夫だと思っ

ている。

ちなみに、なゼリユカが四年待ったかと言えば、世間体である。貴族だからある程度は許されても、度が過ぎてはダメだと分かったからだ。

やれるようになった直後、迷い込んだふりをして娼館街に行き、そこで年下趣味の娼婦　ボブカットの栗毛が綺麗で、均整のとれた肢体の獣人だった　で初めてを済ましたことが父親にばれ、こつぴどく貴族としての心構えを説かれて分かったからだ。

十四歳でも、前世であれば十分マズイ年齢ではあるのだが、こちらの世界でならギリギリ大丈夫だ。産めよ増やせよの世界だからだ。子供も立派な労働力である。貧しい地域では、冬の間の食料になつたりするという話もあり、ぞつとしない話だ、とリユカは改めて裕福な家庭に転生したことを感謝した。最悪、意識のあるままにも抵抗できず食料にされた可能性もある。

なんににせよ、もう十四である。ラファランが息子が非行に走らないよう目を光らせているとしても、世間は一応リユカの行動を見逃してくれる年齢である。

自分が床上手であるのは、四年前に確認済みだ。

奴隷を買えるだけのお金も貯まった。

母親同様、背の高い美人に育ったクリスに、リユカをこんにちまで好きでいるようにコントロールすることも成功した。

学校でも何人かの心を掴んだ自信があった。

怖いくらいうまくいったな。

リュカの計画は当初の予定通り進んでいた。彼の容姿以外。

いまだに150センチに届かない身長。授業で大人用の木剣が振れない華奢な体。白い肌と大きな灰色の瞳、癖のある金髪さえも、リュカを子供っぽく見せていた。

これじゃ、人を組敷くことができないじゃないか。

ようするに、リュカは犯罪行為がしづらい体に育ったことが嫌なのであった。どちらかと言えば、身長は190センチを越え、重たい戦斧を軽々と振り回す兄のジルのような体に育ちたかっと思っていた。

本当は医者になる勉強がしたい彼とすれば、父親のつてで王家直属の騎士団へ入れられる遠因となった屈強な体は邪魔でしかないだろうが。

兄弟で体が逆だったらよかつたのに。さすがにそこまで贅沢を言ったらばちが当たる……か。

この体のおかげで女性に警戒心を与えないし、四年前と同じ手口が使える。そうポジティブに考え、リュカは貧しい農民の子供に変装し、夜中、伯爵家の屋敷を抜け出して娼館街へ向かった。

しかし、リュカはこの日、一人として女性を抱くことなく慌てて屋敷へ帰ることとなる。

娼館街に赴き、リュカはすぐに以前来たときと様変わりしていることに気づいた。以前は下品な活気に満ちていたのに、現在は人影もまばらで、明らかに静かになってしまっている。

これはどうということかと、近くの飲食店で軽くお腹を満たしながら周りの会話に耳を傾けた。その話を要約すれば、こういうことだった。

まず、北方から帰ってきて、いざ娼婦を抱きに娼館街に来た奴隷商人が重い病にかかり死んだ。次に、奴隷商人と関わりのある娼婦が同じ症状で死に、死体を片付けた奴隷商人の仲間も死んだ。これは呪術かなにかだ、と奴隷商人の買い付けてきた奴隷を調べると、奴隷達も多くがこの病に苦しんでいることが分かった。

そして街では自粛ムード、と。要するに北方で流行っていた病にかかった男が祖国へ帰ってきて発症したつてのが実際のところなんだろうと思うけど……。なんでこの世界の人達はそこから「奴隷達が自らを犠牲にして奴隷商人を呪ったのだ」と考えるのかな。

北方の人々を蛮族として扱っているくせに、心のどこかで後ろめたいものを感じているから余計にそうやって攻撃的になる。奴隷を買う気でいる自分のことは棚に上げて、リュカはそういう考え方ができない人間を見下していた。

だから屋敷へとんぼ返りしたリュカはここを治めている父親に報告するより先に、メイド達やコック達に「なにをするにしても、手を洗い、うがいをする事。屋敷の中にあるものはまずそれが清潔

であることを確認してから使うこと」を厳命した。馬鹿だとリュカが思った領民は後回しだった。

前世では当たり前な衛生管理も、ウイルスや細菌の存在を大多数が知らず、何か病が起きれば呪術と考える人の多いこの世界では進みすぎていく感のあるこの命令にも、メイド、コック達は黙って従った。リュカは優秀な人間を登用した父に感謝した。もちろん、なぜそんな知識を持っているのか怪しまれないように、「この間、父と会食したさる高名な学者の言っていたことだ」と嘘の情報を付け足すことを忘れなかった。

社交界デビューも果たし、兄のかわりに半ば父の秘書じみたことをしているリュカなので、この嘘はリュカにとって疑いを晴らすと同時に信憑性を高める都合のいいセリフだった。その分、あまり使いたくなかったのだが。下手をすれば自分が死ぬかもしれないという状況では仕方ない。

この対処がどれだけ功を奏すか分からなかったが、メイド、コック達がリュカの命令を素直に聞いたことを確認してから、リュカは仕事中の父に話をしにいった。

「お父さん、お話があります」

仕事を終えてパイプをくゆらせていたラファランは、リュカが突然自室に来たことにあんのじょう驚いた。普段、リュカは自分から何かを主張することのない子、として通してきたから無理もない。

「どうした、ラファラン」

「街で病が流行りつつあります。どうやら何年か前、北方で流行っ

たものようです」

何が起きたのかと訝しむラファランに、誰から聞いたのか、いつ聞いたのかなどの情報は一切入れず、簡潔に伝える。ラファランの顔色が変わる。

「すぐ対処する。よく伝えてくれた」

即座にラファランは仕事モードに入った。それ以上リュカにも何も聞かず、リュカも何も言わない。その程度には、父子は信頼しあっていた。

その日から、地獄のような日々が始まった。

ラファランもリュカも眠れない日々が続いた。デマを抑え、正しい情報を流すように努め、様々な分野の専門家を交えて話し合いの場を持ち、王国に早馬を出して援助を頼み、どうにかして流行を抑えようとした。

しかし、その努力もむなしく、市民はデマに惑わされ、正しい情報は信じず、専門家の話が理解できない人間が大多数で、王国の援助も焼け石に水だった。

結果、ロークフィード領民の役十人に二人が病で死に、奴隷の多くがデマに惑わされた市民の起こした暴動によって殺され、それを鎮圧するために領兵が投入されるといふ最悪の事態に陥った。

グレーネス家自体は、リュカの初動が良かったのか、それともただ単に幸運だったのか。伯爵家族から、下っ端に至るまで百人を超

える人間がいるにも関わらず、犠牲者は一人だけという奇跡的な結果になった。

ラファランはその死んだ使用人を手厚く葬った。

その使用人は、リュカが一番なついていた使用人だったからだ。

名前を、マイラ・ブラッドと言った。

マイラが死んでも、リュカは驚くほど冷静でいられた。冷静でいる自分自身に驚いたほどだった。

まあ、死んでしまったものは仕方ない。ハーレム計画から、彼女を抜かすだけのことだね。むしろ、マイラー人よりも、目を付けていた同級生が何人も死んでしまったのが惜しい。

そう考えていたし、むしろこれは好都合かもしれないとも思っていた。マイラの夫もまた、病に倒れて帰らぬ人となっていたのだ。親族の居ないクリスは今や天涯孤独の身だった。

天涯孤独なら、彼女に何が起きても気にする人間はいないだろうな。ある程度のことなら、今の僕ならもみ消せるし。

リュカはこの機会にメイド見習いであり、幼馴染である彼女を手籠にする気でいた。だからマイラとその夫の葬式がしめやかに行われたあと、さすがに疲れた顔をしているラファランにリュカは提案した。

身寄りのないクリスをグレーネス家に住み込みで働けるようにしてはどうかと。

もちろん、リュカが好きなきにクリス呼び出せるように、という意図だったが、ラファランは家族同然だった人を亡くしたリュカと家族を亡くしたクリスが寂しがっているのではないか、不安に思っているのではないかと気がかりであったので、お互いのためになるだろう、と快く首を縦に振った。

リュカは慕っていたメイドが死んで悄然とうなだれている風を装いながら、物陰で舌を出した。

両親を亡くして傷心の彼女なら、誑かすなんて朝飯前だね。むしろ、僕の他にそう考える輩が出るだろうな。彼女を狙っている男は同じ平民だけじゃなく貴族の子息も少なからずいるというし。なら、早いほうがいい。

ラファランは迅速だった。その日のうちに自らマイラの家赶赴き、頑なに謝辞するクリスを説得し、屋敷の中にクリスの部屋まで用意した。クリスは何も知らずにお膳立てしてくれる父に感謝した。

その夜、適当な理由を付けてクリスを部屋に呼んだ。

「失礼いたします」

行儀良く部屋に入ってきたクリスを見て、リュカは驚いた。

「……髪、切ったんですね」

「ええ」

腰までであった銀髪が、今や肩にもかからないほど短くなっている。髪を切ったせいかわ、クリスがやたらと無表情に見えた。

いや、思い違いじゃないな。

一歳年上の、良く笑い、良く怒り、よく泣いた彼女が、今は氷か何かのような冷たい顔をしていた。

リュカは悟る。

僕は、彼女に死んだマイラの面影を見つけたかったのか。

マイラが居ないということを、リュカは初めて実感した。

「短いのも、お似合いですよ」

「ありがとうございます」

声が震えた。それにクリスが気づかないふりをしてくれたのが嬉しかった。

泣いてはダメだぞ、僕。彼女を手籠にするんじゃないのか？

リュカは平静を装って予定通りのセリフを紡ぐ。

「子供の時のように、一緒に寝ませんか？ それとも、僕ではお嫌でしょうか」

多少なりとも逡巡されると思っていたが、クリスは首を縦に振った。

「それが主君の命とあらば」

時代がかつた、どちらかと言えば騎士が主君に言うような言葉。以前の彼女では考えられない言葉遣いに、リュカはもう限界だった。

「やめてくださいよ。そんな言い方」

苦笑は泣き笑いにしかならず、リュカは膝から崩れ落ちた。そんな彼をクリスが抱きかかえる。マイラと同じ、いい匂いがした。ここに生まれたとき、初めて嗅いだ香りだった。

「申し訳ありません」

クリスはリュカを強く抱きしめる。

「リュカ様は、お疲れなのです。お早めに、床につきましょう」

クリスの胸の中でリュカは何回も頷いた。

そうだ。彼女の僕への気持ちを確認にするために、これは必要なことなんだ。別に、マイラが死んだ事が悲しいわけじゃない。

クリスに抱きかかえられ、リュカはベッドに寝かされる。クリスも、リュカの隣に体を滑り込ませ、再びリュカを抱きしめる。

「前から、両親には反対されていましたが、リュカ様を守るために騎士になろうと思ってたんです。ですから今日、髪を切り、口調を変えたのですが……。ダメですね、私は。」

リュカは、クリスも泣いてることに気づいた。

「明日からまた、リュカ様の騎士になりますから、今は、今だけはお許しください」

そう言って、クリスは一層強くリュカを抱きしめる。

結局、その日リユカはクリスを抱くことができなかった。

番外 クリステイアナは笑わない

クリステイアナ・ブラッドは考える。

もし、リュカ・L・グレーネスが生まれなかったなら、私はもっと普通の人生を送っていたのではないか。母のようにグレーネス家でメイドをして働き、どこかで人生の伴侶となる人と出会い、平凡な、幸せな一生を終えられたのではないか。

しかし、クリスが生まれて一年後、リュカが生まれ、誰の提案なのか、今となってはどうでもいいことだが、リュカの遊び相手として屋敷で過ごすようになり、自然と彼に惹かれた。惹かれてしまった。

リュカへの恋心を自覚する頃には「身分違いの恋が実るのはお話の中でだけ」と悟ってしまっていたのが、彼女の不運だった。クリスは普通の女の子のように告白することもできず、ただその思いを膨らませていった。

そんな時、ラファラン様からリュカ様やジル様と一緒に仕事をを見ていて欲しいと言われた。今考えると、おそらく、ラファラン様は薄々私の気持ちに気づいていたのだろう。そして、ラファラン様は立场上、私の恋を諦めさせなくてはならなかった。だから、私がどんな身分の人間に恋をしているのか分からせようと思って同席させたのではないか。

結果として、その目論見はうまくいかなかった。

最初はただリュカと長く一緒にいたいがためにクリスが提案して

始まった感想の言い合いで、予想以上にリュカが的確な感想を話したのだ。クリスはこの時、「私の主君はこの人だ」と自分の人生をリュカに捧げることを決めた。

とは言っても、今思えばあの時のリュカ様は結構子供っぽいことも言っていたが。

時を同じくして、クリスは騎士という存在を知る。主君のために命をなげうってまで忠義を尽くすその姿が、自分の目指す姿と重なった。

騎士になれば、一生リュカ様の隣にすることができる。私は、安直にそう考えたのだったな。

両親に騎士になりたいと無邪気に言って、猛反対されたことを思い出す。それ以来、両親を困らせたくない一心から騎士になりたいと言ったことはなかった。ただ、一生徒として同級生と談笑するとき、メイドとして働いているときなど、いつも心のどこかに騎士になった自分がいた。

騎士はもつと毅然としている。騎士は笑わない。騎士は泣かない。騎士は強い。騎士は戦場で邪魔になるから長髪ではない。騎士は騎士は騎士は騎士は……。

全てはクリスが勝手に作り上げた騎士像の言っていることだったが、本物を知らない彼女にはそれが全てだった。

そうやって一人歩きしていった騎士像が次第に彼女自身を侵食し始めたのは、ジルが騎士団に行き、リュカがラファランの秘書じみたことを始めたあたりからだ。その内に、矛盾しているようだ

が、人前では以前のクリスを演じていたにも関わらず、以前の自分がわからなくなっていた。

そして、その騎士という人格は両親が死んで顕現する。

両親が死んで、騎士になるという欲求に歯止めが効かなくなつた。騎士にあるまじき行為だ。

騎士にあるまじき行為も何も、そもそもの発端が騎士という人格のせいなのだが、今、彼女は自分の矛盾に気づけないうでいた。

それでも、マイラの面影を欲し、それを得られないと悟つたりユカの涙で一旦彼女は元に戻った。しかし、彼女は自分が翌日にはまた騎士の人格に戻ることを分かつていた。だからこそ、彼女は「明日からまた、リュカ様の騎士になりますから」と言った。

わざと、『自分の意思で騎士として振舞っている』と思わせることで、リュカに希望を持たせたかったのだ。「いつかまた、マイラの面影を残すクリスに会える」という希望を。本当は「明日には、騎士に戻ってしまいますから」であるにも関わらず。

「なぜ、あんなことを言ったのだろうな。主よ」

そんな昨日の自分の気遣いを理解できず、目覚めたクリスは隣で寝ているリュカに話しかけた。

返事はなく、クリスは騎士であれば主君と褥を共にしないだろうと気づき、ベッドからいそいそと出た。

隣の人が居なくなつたのを敏感に察知したのか、リュカが目覚

ます。

クリスは作った笑顔でおじぎをした。

「おはようございます。リュカ様」

リュカも気づかないほど、クリスの過去の自分を真似る技術は完璧だった。

リュカは朝からいらついていた。主に自分自身に対して。

認めよう。僕はマイラのことを大切に思っていた。それは認めよう。だけど、なんだ昨日の体たらくは！ 何が彼女の僕に対する気持ちがどうたらこうたらだ！

それに加えて、昨晚あんなことがあつたにも関わらず、何事もなかったかのように振舞うクリスにも、多少いらついていた。

僕は、確かめる必要がある。

学校で数を減らしてしまった同級生達と談笑しながら、リュカはそのことばかり考えていた。もちろん、同級生にイライラしていることを感づかれるようなへまはしなかった。

僕は、確かめる必要がある。自分に、ハーレムを作るだけの度胸があるのかを。

リュカは自分の能力に疑問を持ち始めていた。そして、自分に疑いをかけたままではうまくいく訳がないことを知っていた。

疑問を払拭する方法も知っていた。

誰がいいかな？ 同級生で目をつけていたのはあらかた死んでしまったし……。仕方ない。家族にバレやすそうだから、あまり手を出したくなかったけど、メイド達の誰かにしようかな。こういうときの為に、内緒で裏稼業の人のうちの信用できる人を雇っている

んだし。その人の力量も見ることでしょう。

彼は、今日、自信を取り戻すためだけに、女性を誑かそうとしていた。

もし、これでうまくいかなかったら……？ いや、そんな時なんて考えない方がいい。

頭の中でメイド達のリストをピックアップして、都合のいいメイドを探す。消去法で消していき、最後に残った人間の顔を思い浮かべて、リュカは人の悪い笑みをこぼした。

あー。彼女ね。うん。確かに、ちょうどいいかな。

リュカは、学校から帰るとすぐにその子を探した。彼女はちょうど庭で干してあったシーツを取り込んでいるところだった。

「エステルさん」

「あ、はい！ なんででしょうか。アッ！」

リュカが後ろから声をかけると、彼女は勢い良く振り返って、そのままこけた。シーツも巻き込んだので、洗い直しは確実である。

「ああ、すみません。急に話しかけて」

「い、いえそんな。私が悪いんです」

涙目で立ち上がる彼女の頭には、ピョコピョコと動く猫科の動物と同じような耳が付いていた。長いスカート裾からは茶色のしっ

ぼも覗いている。

エステル・ルーデン。14歳。獣人。真面目な人柄がうかがえる。ただ、メイドとしてまともに働けるかは甚だ疑問。ヒラリス村出身。

数か月前にあったメイドの雇用試験での面接官の報告書を思い出す。リュカも誰を雇用するか会議に立ち会ったのだが、そのときは彼女がメイドとして雇われるとは思っていなかった。

いや、父が「家柄より人柄」と言い出さなければ、実際に彼女は雇われなかっただろうな。

「えと、何かご用でしょうか？」

洗濯かごに汚れたシーツを戻したエステルが、リュカを見上げた。彼女は、この屋敷では数少ない、リュカより背の低いメイドだった。髪型は茶色のポプカットで、大きな同色の瞳のせいか、どこか子供じみた印象がある。

「エステルさんに、ちょっと今夜頼みたいことがあります。深夜に僕の部屋へ来て欲しいんですが」

「あ、はい。私で良ければ」

何をするのか聞いていないのに、エステルは二つ返事で引き受けた。

自分が酷い目にあうと思わないし、人が酷いことをするとも思わない。前世で言えば、詐欺に会いやすいタイプ。

「ただ、人に知られたくないので、何か用事を作って、暇を貰ってください。そうですね……明日の夕方には戻る、ということにしておきましょう。一旦屋敷を出たあと、夜、裏口からこっそり入ってください」

「わかりました」

「他の人には秘密ですよ？」

秘密、というのを強調すると、エステルはいたずらっぽく笑って、では、と仕事に戻っていった。

さて、僕も準備があるし、誰かに見られてもいけない。退散しようかな。

「失礼します」

深夜、質素な普段着を着てドアをノックしたエステルを招き入れ、リュカは彼女を乱暴に押し倒した。

「え？ あ、あの！ リュカ様？」

リュカの下で目を白黒させるエステル。リュカは何も言わず無理やり彼女の唇を奪った。あまりに驚いたのか、エステルは抵抗しなかった。

数秒後、リュカは唇を離して、真摯な顔で、悲壮感すら漂わせて

言った。

「僕は、マイラが居なくなつて寂しいんだ。君に埋めて欲しいと言つたら、拒絶するかな」

嘘だ。マイラが居なくなつて寂しいというのは真実だが、誰かにそれを埋めて欲しいとは、もう思えなかった。ただ、リュカはそう言えば彼女は抵抗しないだろうと踏んでいた。

案の定、エステルは迷つた末に、目をつぶつて「どうぞ」とだけ言った。

「……ごめんね。なるべく優しくするから」

何回もバレそうになつて……。雇つた人間が実際に優秀でなかったら危ないところだったよ。まあいいや。その分、強引にでも楽しませていただくし。

言っていることと思つていることが違いすぎて、自分で笑つてしまひそうになつたのをじつところらせるリュカだった。

翌日、足腰が立たないと言ひ出したエステルのおかげでもう一度裏稼業の人間に出張つてもらひ、「用事が増えて帰るのが遅くなる」ことにするはめになるのを、現時点でリュカは知らない。

10 (後書き)

最近「鬼畜」成分が薄くなってきたのでこういうお話を挟みました。男尊女卑っぽくなっていたらごめんなさい。女性には優しく接しましょう。

エステルはもともと使い捨てのつもりでしたが、一話分丸々消えてしまって書き直している間にあまりにかわいそうになってきたので、またどこかで出てくるかもしれません。

実にどうでもいいことですが、エステルの苗字は某ドイツの戦車撃墜王をもじっています。

「行ってらっしゃいませ」

毎朝繰り返されるメイド達の一言に送り出され、リュカはクリスと学校へ向かった。ちらっと見えた、仕事に復帰したエステルのおねたような視線に苦笑いする。

ああいう仕草が嗜虐心をそそるんだって、分からないんだろうなあ。

そんなリュカの様子に、クリスが「どうしました？」と小声で聞いてきた。

「いや、なんでもない」

そっけなく返すと、そうですか、とそれ以上のことは聞いてこない。2人きり有的时候きは、『騎士』で通すことにしたようだった。リュカもそれについては何も言わない。

それ以降、たいした会話もなく、学校についてしまった。クリスの雰囲気が変わる。

「それではリュカ様。私はこちらですので」

口調こそ変わっていないが、明るくなり、華のある雰囲気になった。

人目があるせいか。

リュカもはにかんだ笑顔を作って「行ってきます」と返して、それぞれの下駄箱に向かう。それを見ていた同級生達、特に、貴族の息子に「いいよな、お前んちは。あんな幼馴染の姉ちゃんがいる」とからかい混じりに言われるのもいつものことだ。

リュカの通っている学校は、生徒を身分で差別せず、実力で入れるかは入れないかが決まるという、いわばエリート校であるのだが、前世でのアドバンテージがあるリュカにとっては歴史と国語、そして魔法学以外はまだまだレベルが低いと言わざるを得なかった。生徒のレベルもだ。

リュカは教室に入って同級生たちとそつのない挨拶をこなしながら、前世で自分はこんなだったかと考える。が、前世での14歳の自分を思い出せず、記憶力のなさに苦笑させられるだけだった。

その内に予鈴が鳴り、一時限目の男性歴史教師がひよろひよろした体をゆらゆらさせながら教室に入ってくる。

「はい、授業始めますよー。今日はこの前行われた試験の返却と、簡単な解説をするからね」

点呼替わりに、テストを返し始めるどうにもうだつがあがらない30代の教師。

「はい。全員返したね？ じゃ、早速だけど、大問1から。これは、我が国についての基本的な事柄についてだから、君たちには簡単すぎたかもね。現国王陛下の御息であるフランシス王子と、ルネ王女に関する事で間違えてる人が何人かいたけど、正直、教えている僕もこれは歴史の授業で教える範疇じゃないって思ってるから。」

……ごめん、今の発言は忘れて」

授業内容を決めている政府に楯突くような発言をしてしまって、教師は慌てて打ち消した。

「次に、大問2。我が国と敵対関係にある西方のギヤスタス王国だけど、では、ギヤスタス王国と敵対関係となるきっかけとなった104年前の事件について具体的な名前をあげて説明せよって問題。これは、グレーネス君がよく出来てましたね」

周囲から称賛とも嫉妬とも取れない視線を浴びせられ、赤面してうつむく『振り』をするリュカ。

「この問題で書いて欲しかった点は……」

歴史の授業は、その後も淡々と進んで行き、解説が終わり、質問したい生徒が教師に聞きに行く時間となり、それも一段落して誰も行かなくなったことを確認してから、リュカは答案用紙を持って教卓へ向かった。

「すみません、先生。ここなんです……」

答案を指さす。そこには、事前に『昨日はありがとうございました。正直に申しますと、あなたの実力を疑っていません。お許してください』と書いておいた。

「ああ、ここかい？　ここはね、1つ、1つ、1つだよ」

教師はそれを見てさらさらとペンを走らせる。

『見た目がこうだから、裏の人間だと思われたいのはしょっちゅうだし、気にしなくていいよ。君だって、見た目で苦労するだろう?』

「ああ、なるほど、そうですね。僕、先生の生徒でよかったと、本当に思いますよ」

「僕も、君みたいな生徒は大歓迎さ。また何か用があったらいつでも呼んでくれたまえ」

二人は声もなく笑った。

11 (後書き)

また……一話丸々消えて……書き直し……でした……ガクッ

歴史の授業の次、2時限目は魔法学だった。ちなみに、過去、リユカが期待したような、催眠や緊縛といった魔法はあるにはある。が、使ってもいいとされている場合は戦場といった特殊な場所に限られていて、リユカはハーレム作りにこれらの魔法を使うことは諦めた。とは言っても、覚えるには覚えたが。

騎士団みたいな組織にでも入らない限り、使うことはないだろうなあ。

兄が入れられた組織を思い出す。年中国を守るために戦地を駆けているあそこなら、自由にそういった魔法を使えるのだろうが、リユカとすればただ使えるだけでは意味がない。

それに、僕が入っても兄と同じく貴族だからって理由で戦地には送り込まれず、王宮で警護につかせられるだろうし。

物思いにふけっていると、神経質で有名な魔法学の教師にそれを注意される。

「リユカ君。授業を聞いているかね？」

「あ、すみません。聞いてませんでした」

ここは素直に謝っておく。それでも許せぬと見えて、教師は黒板に書いてあった魔方陣の一つを指さした。

「リユカ君、問題だ。これはなんの魔法陣か分かるかね？」

「……すみません。分かりません」

第4次西方戦争で初めて使われた、広域治癒魔法でしょう。一定の物を身に付けていることで治癒する人間を勝手に選択してくれる点が有用で今でも一部で仕様されている魔法ですよね。

あまり出来る人間だと思われたくないのも、わざと間違えておくリュカの回答を聞いた教師は盛大にため息をつき、そのままリュカをいびり倒して授業が終わった。

2時限目が終わり、同級生達から同情のフォローをもらいつつ帰る準備をする。いまだに慣れないが、この世界の学校はどこも自分の学びたい学科を好きなように取れる。まるで前世での大学のようだが、子供も立派な労働力であるこの世界においては、必要な技能だけ習得して就職するということも多いとリュカは知った。

つくづく裕福なうちに育って良かった、などと考えながら玄関でクリスを待つ。クリスはすぐにやってきた。

「おまたせして申し訳ありません」

「いや、いいよ」

いつもどおりの会話をし、二人で下校する。この間の一件以来、クリスはリュカよりも少し後ろを歩くことにしたようで、リュカにしてみれば一人で帰っているも同じなのでつまらない。

「……主君の隣を歩くのは、騎士としてあるまじきこと？」

後ろを振り向いてクリスに聞く。クリスは静かに頷いた。

なんだかなあ。

非常にやりにくい。

マイラを失って、彼女のかわりに僕を守ると決意した結果が、
これなのかな……？

考え事をしながら歩いてきた結果、リュカは曲がり角から飛び出してきた小さな女の子に気付かなかった。肩が触れあって、リュカも、飛び出してきた女の子もバランスを崩した。クリスがリュカを抱きとめて、女の子にも手を伸ばすが間に合わず、女の子はこけた。

「あ、ありがとう」

「いいえ、当然のことです」

後頭部に当たる、ふくよかな胸の感触に思わずリュカは素で赤くなる。それでも、クリスは無表情のままだった。今はそれを気にしている時ではない、と自分に言い聞かせていまだに立ち上がらない少女を気遣った。

「ええと……大丈夫ですか？」

少女は顔を伏せて動かない。異変を感じてのぞき込む。よくよく見ると、少女は裸足であり、身に付けているものはボロボロで、体には無数の傷がある。

リュカが動くより先にクリスが少女を助け起こした。少女はかな

り衰弱しているようであり、倒れた衝撃で意識を失ってしまったようだった。

間違いない。抜けるように白い肌。茶色と金の混じった髪。北方の民族の特徴を持つてる。逃げてきた奴隷か。だとすると……

リュカは耳を澄ませた。すぐに、少女が来た方向から年配の男の足音と怒声が聞こえてくる。

「クリス。逃げ……」

「おい！ お前ら！」

いち早くこの場を離れようとしたが、太鼓腹の男に見つかってしまった。

「ええと、なんでしょうか」

なるべく穏便に済ませようとするが、男の方は子供二人だと侮ったのか、高圧的に出てくる。

「そいつはウチの商品なんだよ。痛い目見たくなかったら返しな、ガキ」

なるほど。各地を飛び回る奴隷商人なら、ここの領主であるグレーネス家の次男の顔を知らないってこともあるだろうな。

グレーネス家の名前を出して追い払うことも出来たが、後々家族に迷惑がかかるのをリュカは避けたい。何より、この男にむかっていた。

「いくらだ？」

リュカは簡潔に聞く。男の顔がまず啞然としたものに、次いで、嘲笑に変わった。

「ハッ、買うつてか？ やめときな。お前じゃ一生手にできないよ
うな額だ」

「僕は、いくらだ？ と聞いたんだ」

クリスの前だったが、リュカは少しだけ本性を表した。男も、目の前の人間に何か不振なものを感じたようで、しばらく黙った後に右手の指を三本立てた。

「金貨三枚だ」

奴隷をいつか買おうと思っていたリュカは、相場も知っている。まともな労働力としては見込めず、娼婦としても売り物にならないこの年齢の娘の値段とすれば、金貨三枚は高すぎた。一級品の奴隷が買える値段だ。しかし、リュカは黙って金貨を三枚取り出して、男の足元に投げ捨てた。

「持ってけ。そして、構うな。失せろ」

よもや出てくるはずがないと思っていたものが出てきて、ぐ、と男が言葉につまる。こんなガキになめられてたまるか、という思いもあったのだろうが、結局男は金貨を乱暴に拾いあげて来た道に戻っていった。

「よい判断だったと思います」

クリスがリュカを褒める。リュカはそれを手で制して、頭を抱えた。

なんで僕は、いままで奴隷を買ったために貯めてきたお金をこいで出しちゃうかな……。

リュカ自身もびっくりするほど、小さな女の子が虐げられているという状況にいらついたのだ。自分はその奴隷制度を利用しようとしていたにも関わらず。

今夜にでも内緒で買おうと普段は持ち歩かない額のお金を持っていたのが悪い。前方不注意だった自分が悪い。少し後ろを歩いて自分に後ろを向かせたクリスが悪い。奴隷商人から逃げてきた女の子が悪い。奴隷商人が悪い。奴隷制度があるこの国が悪い。

いろいろ理由付けしてみるものの、結局事実関係は変わらない。

なりゆきで奴隷を買ったのか、僕は。

どうやら、意識を失ってそのまま眠ってしまった様子の女の子を見つめる。年は10ばかりか。前髪がうっとおしい程に長く、顔をはっきりと見ることは出来ないが、整った顔立ちをしている。といっても、この年齢はさすがに守備範囲外だ。

大きなため息をつく。そうすると、なんだか全てがどうでもよくなってきた、リュカはいつそ晴れ晴れした思いでクリスに言った。

「父上と母上に、妹ができた、と報告しなきゃね」

リュカは開き直って堂々と、胸を張って自宅の間をくぐった。後ろから子供を抱えたクリスが続く。

「お帰りなさいませ」

いつもどおり、手の空いているメイド達が出迎えた。が、優秀な彼女たちも、クリスが抱いている少女に気づいてざわついた。特に、あまり優秀ではない部類のエステルは実際に声を上げてしまった。

「ど、どうしたんですか？」

リュカは一瞬、どう説明したものか迷った。それを見かねて、クリスが一步前に入る。

「下校途中、この子が行き倒れていたのです。商人から逃げてきたのだと想像がついたので、不憫に思い、連れてきました」

エステルがなるほど、と頷いてリュカを見る。

ちよつと見直した。みたいな顔をされても……。

リュカはわかりやすいエステルに苦笑いしそうになるのをこらえつつ、クリスやエステルも含めたその場のメイド達に指示を出す。

「この子を客間に寝かせてあげて。面倒はクリスとエステルさんに任せるよ。かなり衰弱してるみたいだから、栄養のあるものを作るようシェフにも言ってるね。あと、この子に服を見繕ってあげて。あ、

お風呂もよろしく願います」

メイド達が慌ただしく動き出し、屋敷の中がにわか騒がしくなる。そんな中、リュカは屋敷の奥へ向かった。

「父上、失礼します」

ノックしてラファランの書斎に入る。書類に判を押していたラファランは、普段自分の仕事の邪魔にならないよう気を付けている息子が突然部屋にやってきたことに驚いたようだった。

「どうしたんだ」

「奴隷の子を買いました」

「……………詳しく説明するんだ」

普段、温和な紳士然といった態度を崩さないラファランが厳しい顔をして命令したことに緊張しながら、リュカは経緯を説明する。

リュカの説明を聞き、ラファランがため息をつく。その反応に、さすがに不安になって上目遣いに聞いた。

「……………僕の対応は間違っていたのでしょうか？」

「いや、そんなことはない。そんなことはないさ。お前は正しいこ

とをした」

ラファランが心配する息子を安心させようと笑顔を作る。しかし、その笑顔もすぐに曇ってしまった。

「ただ……お前に説明するまでもないだろうが、グレーネス家はこの国の奴隷制に反対している一派に所属している。だからこの屋敷には奴隷はいないし、グレーネス家が関わる場に奴隷を雇ったこともない。しかし、王室としては奴隷制を続ける方針だ。そのため、私が治めているこの地でも奴隷商人が大手を振って闊歩しているわけだ」

リユカもその辺の事情はよく知っている。ラファランが何を言いたいか汲み取った。

「奴隷制を続けたい勢力と、奴隷制を止めさせたい勢力の力が拮抗している中で、止めさせたい勢力のNo.2の家が奴隷を買ったとなると、相手勢力を勢いづかせるだけではなく、味方勢力から突き上げを食らうのは必至、ですね」

「No.2というのは言い過ぎだろう」

「ジード侯爵がトップだというのは誰もが分かっている事実ですし、有力貴族のミユレーズ伯爵はほぼ隠居状態で今は孫娘に任せっきりとなれば、No.2はこの家かと」

「まあ、そうではあるが……」

ラファランの抗議をあっさり受け流しつつ、改めて自分がどんなに軽率なことをしてしまったのかリユカは認識する。

奴隷制を止めさせたい勢力のほとんどは、僕のように自分の利益しか考えてない輩だから、不利益を被ると判断したら手のひらを返すだろう。これは「不利益を被る」と判断されてもおかしくない事態だ。

そうしてグレーネス家が没落しては、リュカの計画がパーになってしまう。それを避けるためにも、早急に手を打たなくては、とリュカは考え始めていた。

「その子は今どうしてるんだい？」

手紙を書こうとペンをとったラファランが思い出したように聞く。

「クリスとエステルさんがみています」

「そうか……後のことはいいから、お前も見に行つてあげなさい」

私は各所に説明の手紙を書くから、というラファランにリュカは抗議した。

「いえ、僕もお手伝い……」

「ならん」

珍しく、ラファランの口調が厳しいものになる。父に反対されるとは思っていなかったリュカはあっけにとられ、渋々頷いた。

「……わかりました。では、失礼します」

ドアに手をかけてから、振り返ってラファランに聞いた。

「僕の対応は間違っていましたか？」

「いや、正しい行いだったださ」

その答えに少なからず安堵しつつ、父の部屋を出た。

そうだね。確かに正しかったのかもしれない。ただ、僕は別人として清く正しくあろうなんて思っていないんだ。

そこが問題だ。とばかりにリュカは小さくため息をついた。

それなのに、とっさにあの子を守るような行動に出してしまった。なんでだろう？ 平坂薫としての性分だろうか？

前世の自分がどんな人間だったか思い出そうとする。が、頭に霧がかかったようになってよく分からなくなってしまう。普段は前世での知識が思い出せるだけで十分だ、と思っている分、だんだん忘れてきているのかもしれない、と考えた。

もし、本当に前世での性分を引きずってるようなら、知識以外はさっさと全部忘れるべきかな……？ 今もほとんど覚えてないし。

考え事をしている間に、自然と足は女の子が通されたであろう客間にむいていたようで、いつの間にかやら慌ただしく廊下を走るメイド達の姿が見えてきた。そのうちの一人を呼び止める。

「女の子は？」

「一番奥の客間にお通ししました。まだ目を覚まされませんので、お言いつけ通りクリステイアナとエステルが見ております。目を覚まされるころには、湯浴みの準備も整っているかと」

礼を言って、奥へ。軽くドアをノックする。

「入っても大丈夫かな？」

「どござ」

「どござ」

二人の返答が重なる。リュカは静かに客間へと足を踏み入れた。柔らかなベッドに女の子が寝かされていて、傍らでエステルとクリスがリュカにはよく分からない類の魔法を唱えていた。

体力回復とか、そういうのかな？ 僕は『誰かから奪つ』『誰かを痛めつける』系統の魔法以外は人並みだからな……。

二人の邪魔しないよう黙って枕元に立ち、女の子の乱れた長い前髪をなでつけてやる。

間近で見ると女の子はひどく痩せていて、切ってもらえていなかったのだから長い前髪ともあいまってどこか儂げに見える。

ただ、今のところ女の子は一見静かに寝ているようで、その寝顔のおかげでリュカは何故か自分自身が救われた気がした。その理由を彼は分からず、前世のせいだ、と結論づけておいた。

しばらくすると女の子は目を覚ました。リュカは、何が起きているのか把握できない彼女をクリスとエステルの手でお風呂にいれさせた。

その後、彼女は目を白黒させていたが、抵抗もしなかったし、一言も喋らなかつた、とクリスに報告を受けた。

「変わった子だね」

「私もそう思う。彼女はどこか異質だ」

リュカの呟きに、クリスが同意する。エステルと女の子がまだ帰ってきていないので口調が『騎士』になっているのはスルーして、リュカは聞き返す。

「異質？」

「ああ、気にしないでくれ、主よ。ただの感覚として、そう思っただけだ」

女の感はよく当たるといつけど……。

嫌な予感を感じつつ、客間のベッドに腰掛けて待っていると、エステルとぶかぶかの寝間着に着替えた女の子が戻ってきた。

「すみません……探してみましたけど、これ以上小さい服は私でも持ってませんでした」

エステルが頭を下げる。

「いや、仕方ないよ。必要な物はまた買うことにしよう」

また、出費になるな。

全く、ハーレム要員として買う予定だった奴隷のせいで、いくら散財するんだか、などと考えながら女の子を見ると、女の子はじつとリユカを見ていた。何となくリユカは目をそらす。そんなリユカの様子に、女の子は何か考えたあと、そっとリユカのもとに駆け寄ってきて、手をとった。

子供特有の、柔らかな手の感触。リユカは、過去にもこんなことがあったような気がした。

気のせい……だよな。

「なあに？」

内心の動揺を隠して笑顔を作る。女の子は答えない。ただじつと見つめてくるだけだ。彼女の無垢な瞳に、リユカはだんだんと動揺が隠せなくなっていた。

「えっと……お、お腹すいたのかな？ あ、ト、トイレ？」

女の子は答えない。

「えっと……あの……その……あっ、そうだ。君の名前は？ 名前はなんていうのかな？」

苦しまぐれに言った質問が、何故か女の子の表情を笑顔にした。
蚊の鳴くくらい

の小さな声で、女の子が応えた。

「サルマ＝セルマ・ヘイロフスキー」

「そう……いい名前だね……僕はリュカ。リュカ・L・グレーネス。」

分からない！　僕はこの子が分からない！

心の中で悲鳴をあげながら、リュカは笑う女の子にあわせて笑顔の真似事をした。

16 (後書き)

女の子の命名は適当です。サルマはイスラムの女性名、セルマはヨーロッパの女性名、ヘイロフスキーはチエコスロバキアの人名からとりました。つまり、「無茶苦茶な女の子」ということです。

サルマセルマ・ヘイロフスキーはリュカの膝の上に座り、長い前髪を手で弄っていた。そんな彼女をラファランは複雑な顔をして、アデライトは新しい娘でも出来たかのようにニコニコと見つめていた。リュカは諦めた様子で、サルマの邪魔にならないよう手を伸ばして白身魚のソテーをほくしている。

時刻は、8時。サルマが連れてこられたことによるひと騒動が終わり、アデライトの提案による夕食も中盤に差し掛かった頃である。

本当はサルマのための席も用意してあったのだが、彼女はそれに座ろうとしなかった。というよりも、リュカから離れることを嫌がった。

「あらあら、なつかれちゃったわねえ」

などとアデライトが呑気に言い、リュカの前に二人分の料理を用意させて今の状態になっている。

「ほら、あーん」

リュカが食べやすいようにほくしてやったソテーをフォークにさしてサルマに食べさせてやると、サルマは美味しそうにそれをほおばった。笑顔がはじける。

困ったな。

サルマに笑顔を返しながら、リュカは別のことを考えていた。

この子についてまわっていると、活動しづらいな。いつそのこと……。

一瞬、人として最低な解決法を考えたが、慌てて、打ち消した。

エステルやクリスには僕がどういう人間か多少知られている。多少知られても大丈夫な人間だからあえて知らせている、という点もあるけど。それでも、『そんなこと』をすれば彼女たちがぼくを疑う可能性もないと言い切れないわけで……。

ソテーをもうひと切れ食べさせてやりながら、また先生に『お願い』することも考えたが、その考えも即座に却下した。

ダメだね。先生に頼るのも良くない。所詮あの人は金で雇われているだけだ。いつ裏切るかもしれない人にあまり情報を与えすぎるのは良くない、と思う。

なら、どうするか。彼女がこの家を追い出されることはありえないだろう。そして、ラファランは自分に責任を取らせようとすることもリユカには分かっていた。

「お父さん、お母さん。この子のことなんですが」

意を決して、両親に話しかける。二人は手を安め、リユカの話を聞く体勢になる。リユカは二人を見据えて言った。

「僕がこの子の面倒を見ます」

別に、この子を不憫に思ったとか、そういうんじゃない。ただ、

どうせ父はそういった責任の取らせ方を提案してくると思ったから、
先手を打っただけ。それだけなんだ。

リュカは自分に言い訳をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8702x/>

リュカ・L・グレーネスは分からない

2011年12月18日03時45分発行